

乗用型機械導入茶園における幼木茶樹の仕立て

[要約] ペーパーポット苗木を用いた幼木茶樹の仕立てにおいて、定植4年目の生葉収量は、定植3年目まで夏期に歩行型機械を用いて樹高を低くせん枝すると枝条数が増加し、秋整枝で乗用型摘採機による摘採樹高にすると、慣行管理と同等の収量となる。

総合農林試験場・東彼杵茶業支場	専門	栽培	対象	工芸作物類	分類	指導
-----------------	----	----	----	-------	----	----

資料名：平成12年度 長崎県総合農林試験場東彼杵茶業支場 試験成績書

[背景・ねらい]

乗用型摘採機は刈刃の最低地上高が47～52cmのため、乗用型摘採機を用いると現在の幼木茶園の仕立て法が応用できない。そこで、ペーパーポット育成苗木の定植後の管理法として、乗用型管理機械導入茶園に対応した幼木茶樹の仕立て法を検討する。

[成果の内容・特徴]

1. 定植後の初回せん枝から一貫して乗用型摘採機で管理すると、樹高が高くなり、地際付近の分枝が少ないため摘採面を構成する枝条数が少なく、4年目の一番茶収量は慣行管理より少ない(表1, 図1, 2)。
2. 定植4年目の乗用型摘採機による一番茶および二番茶収量は、定植2年目の初回せん枝を樹高30cm、秋せん枝を47cm、および3年目の1回目せん枝を40cm、秋せん枝を47cmで行い、47cm未満のせん枝に歩行型機械を用いて樹高を低く仕立てると、慣行管理と同等である(表1, 図1, 2)。

[成果の活用面・留意点]

1. ペーパーポット苗木は、「やぶきた」を用いた秋さしによる育苗期間7ヶ月のものである。
2. 歩行型機械も用いて樹高を低く仕立てる場合でも、樹勢がある場合は3年目の一番茶を乗用型摘採機で摘採できる。
3. 肥料は、被覆尿素肥料を主体に成木時窒素60kg/10a リン酸、カリ30kg/10a 量を、定植2年目は40%、3年目は60%、4年目は80%量を年3回施肥した。
4. 定植4年目夏期まで堆肥の施用を行わなかった。

[具体的データ]

表1 仕立て法のせん枝・摘採高 (cm)

区	管理方法	定植2年目		定植3年目		定植4年目(摘採)	
		7月22日	11月12日	7月13日	11月10日	5月12日	7月4日
	乗用型機械による一貫管理	47	47	50	52	54	56
	歩行型機械も用いるせん枝	30 *	47	40 *	47	50	52
	夏期に強度のせん枝をしない	心抜き	47	徒長枝のみ	57	59	61
4	歩行型機械を用いた慣行管理	30 *	35 *	40 *	47	50	52

注) 栽植: H9年3月定植、二条植え、株間45cm、条間50cm、約2,500本/10a

~ 区: ペーパーポット育成苗木を定植(秋さし苗木、育苗期間7ヶ月)

4区: 慣行管理(露地さし苗木、育苗期間1年9ヶ月)

せん枝と摘採: * のせん枝は歩行型せん枝機による、摘採は全区乗用型摘採機による

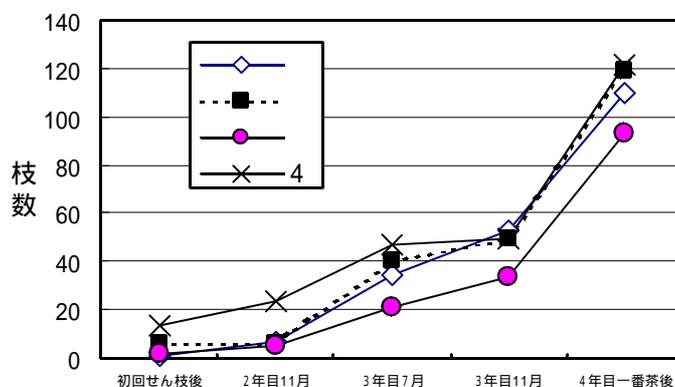


図1 仕立ての違いによる摘採面枝条数の推移 (本/株)

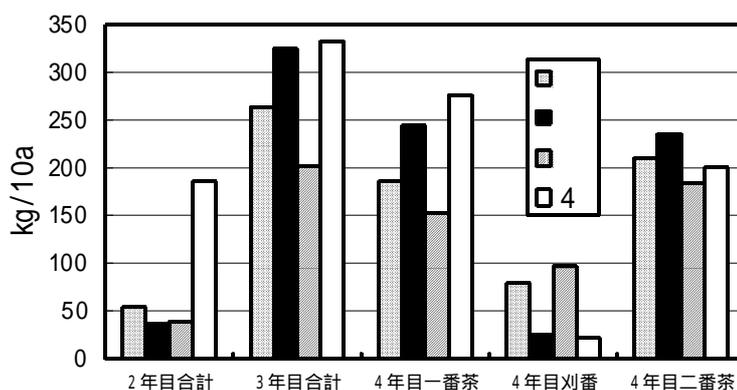


図2 仕立ての違いによるせん枝量および生葉収量

[その他]

研究課題名 : 中山間傾斜地茶園のテラス式整備法と省力・軽作業化技術の開発

予算区分 : 国庫(地域実用化)

研究期間 : 平成12年度(平成10~12年)

研究担当者 : 淵 通則、古賀亮太、森山新三郎